笠岡文化散歩（３）

森谷司朗（映画監督）と笠岡

森谷司朗は 1931 年に東京で生まれ、1984 年に 53 歳で逝去しています。巨匠と謳われた成瀬巳喜男監督、黒澤明監督の下で助監督として研鑽を重ね、キネマ旬報誌で「日本映画の四番バッター」と賞せられました。
「日本沈没」「八甲田山」「動乱」「海峡」「小説吉田学校」など、日本映画史に残る名作を制作しています。
彼の父は保険会社に勤務していて、父の転勤に伴い中学三年生から高校二年生の時期を笠岡駅近くに住んでいました。その間に学校は金光学園に通学しました。
笠岡の印象が後年まで色濃く彼の心情に影響を与えたのか、代表作の一つ「海峡」は笠岡で撮影されたシーンがあります。

栗まんじゅうと備前焼湯呑

主人公（高倉健）が瀬戸内の一地方に独り暮らす父（笠智衆）を訪ねる場面は神島の日光寺で撮っています。
撮影当日の早朝五時頃に笠岡の菓子舗・清月堂に電話が掛かり、父子で茶を飲みながら話す場面に菓子が無い。直ぐに持ってくるようにと依頼があったそうです。これは森谷司朗と親交の有った清月堂・大月泰志氏からお聞きしました。
映画を見直すと備前焼の湯呑が二つ、その真ん中の菓子皿に二つ栗まんじゅうが載っていました。この場面で伊万里焼でも九谷焼でもなく、備前焼を使ったところが凄いと想います。地元で長らくお茶請けとして親しまれて来ている栗まんじゅうを使うことにも感動しました。映画に登場する湯呑と菓子で、観る人は、ここが瀬戸内地方であることを自然に受け入れます。そこまで拘らなくても観る人には解からないだろうと想うか、映画の隅々まで拘って制作するのかは監督の個性でしょう。現在のようにＤＶＤが普及して、気に入った映画を何度でも繰り返し観る時代になると、一度目には気が付かなかったことに何度目かに注目することがあります。

神島・日光寺から見る笠岡諸島

「海峡」の中で海を背景に父子が語るシーンを始めて観た時に懐かしい感覚を覚えました。笠岡と似ているなぁと想いました。そのはず笠岡の神島から眺める笠岡諸島をカメラは捉えています。

西井林亭 題字「海峡」

大月氏は森谷監督から題字の相談を受けたそうです。そして、笠岡の書家である西井林亭を紹介しました。その折に、映画の内容を伝えたのでしょう。完成した映画の始まりに出来くる「海峡」は骨太の堂々たる楷書です。エンドロールには西井林亭の名が在ります。

森谷司朗は同じ映画監督の山田洋次（男はつらいよシリーズほかを制作）と同年です。現存なら 81 歳です。
健在でその後にも名画を制作していたら、笠岡でもっと撮影して頂きたかったと想います。（文中敬称略）

「海峡」
昭和 57 年芸術祭参加作品
出演者　高倉健　森繁久弥　吉永小百合
　　笠智衆　大滝秀治　三浦友一

笠岡ライオンズクラブ・笠岡東ライオンズクラブ合同例会にて懇親会の折に、L. 大月泰志にお聞きした内容を基に記事にしました。　（L．豊池 勇）